

「食と農」の博物館・バイオリウム

「食と農」の博物館

東京農業大学「食と農」の博物館は、東京農業大学110周年記念事業の一環として2004（平成16）年に開館しました。120年を超える本学の研究実績や教育実績を、広く社会に発信する情報基地としての役割を担い、文字通り「食」と「農」に関わる様々なコンセプトによる展示や講演会、講座、体験学習などを展開しています。この活動によって、博物館が建つ地域の方々のみならず、大げさでなくワールド・ワイドに受け入れられ今日に至っています。本学学生の皆さんや教職員、また卒業生の方々にとっては、改めて「東京農業大学」に対する理解を深める場となっているとともに、食と農に関わることの面白さや大切さを再確認し、母校に対する誇りを呼び覚まされていることでしょう。また、博物館相当施設に指定されており、本学の学芸員課程履修者には博物館実習の場として活用され、毎年多くの学生が博物館の実際を体験し、学んでいます。

博物館は世田谷キャンパス内ではなく、世田谷通りを挟んで馬事公苑の正門近くに位置しており、世田谷百景にも選ばれた「けやき広場」に面し、那須高原産の芦野石とガラスを調和させたモダンな4階建ての建物は、世界的建築家・隈研吾氏によるものです。

1階には、創立者榎本武揚や初代学長横井時敬をはじめ、東京農業大学の歴史・沿革を紹介するパネルやゆかりの品々を展示しています。また、屋久杉や秋田杉の巨大な材鑑標本や、トラクターなど、本学の研究・教育に一役も二役もかかってきた貴重な資料が展示されています。一番奥には企画展示室があり、本学の各学部や学科、課程、研究室などからの企画を展示という形にして公開しています。本学には、世田谷キャンパス・厚木キャンパスの他にもオホーツクキャンパスがあることから流水の天使クリオネの生体も展示しており、円筒形の大きな水槽で可愛い姿を披露してくれています。同時に進化生物学研究所の魚類コレクションの一部を見ることができます。

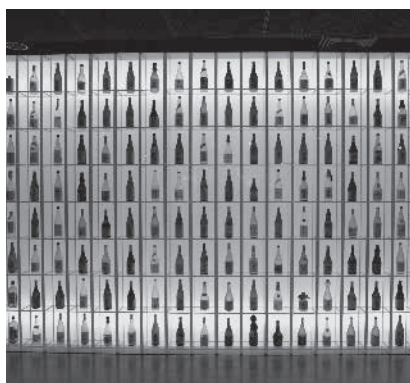
2階は常設展示室になっていて、41品種121体のニワトリの剥製学術標本コレクションがあります。その中には天然記念物の指定を受けている日本鶏17品種の貴重な姿も観ることができます。約230点もの酒器や酒の風俗にまつわる錦絵、本学卒業生の蔵元の造る酒の銘柄280本を紹介する展示もあります。日本産業考古学会の「日本の産業遺産300選」にも選ばれている、当博物館が誇る約3,600点の貴重な古農具コレクションから約30点を、日本の古民家を再現したジオラマと共に展示をしています。これらの展示を含めて、その展示活動の質の高さから学外からも高い評価を得ています。

3階・4階には（一財）進化生物学研究所が入り、研究所が運営する隣接の熱帯動植物園のバイオリウムとともにまさに食と農に関する様々な「知」を提供する施設となっています。

「食と農」の博物館



「村の古民家」 囲炉裏と鉄瓶



卒業生の蔵元紹介コーナー



学芸員実習風景（企画展示準備）

平成30(2018)年度 東京農業大学「食と農」の博物館「企画展示」及び「特別展示」等の日程

		H30/4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	H31/1月	2月	3月
博物館1階	催事		①					②	③	④	⑤		
	常設展示	CM-BOX、榎本・横井「二人の学祖」解説パネルと関連資料(榎本:愛用のテーブル/横井:弔旗と感謝状)、東京農業大学建学以来の「歴史と沿革」解説パネル クリオネ、トラクタ3台(コマツ、フィアット、フォード)、二母性マウス「かぐや」、鈴木梅太郎の「オリザニン」、屋久スギ・魚梁瀬スギ・木曾ヒノキを初め大型の「材質標本」7点 南禮蔵・麻生昇平リン鉱石コレクション、触れる地球(ミラノ万博日本館出品・全国農業協同組合中央会提供)、進化研コレクションと解説パネル											
	企画展示	展示室A・B(企画展示) 東京農業大学生物産業学部開設30年・北海道150年事業 「北海道オホーツク展」 -北海道の未来を「農」の力で切り拓く- (会期)2018.4.25(水)~同8.5(日) (企画)生物産業学部				展示室A・B(特別展示) 阿部雄介写真展(会期) 2018.8.25(土)~同10.8(月) (企画・主催)「食と農」の博物館				展示室A・B(企画展示) 「ブタになったイノシシ」-家畜化された仲間たち- (会期)2018.10.26(金)~2019.3.10(日) (企画・共催)「食と農」の博物館、学術情報課程 (監修)東京農業大学名誉教授 田中一栄			
博物館2階	常設展示	鶏の剥製学術標本コレクション121体(付属展示:ウィングレス無翼鶏の剥製・骨格標本・幼体標本、タマゴを比べてみよう)											
		東京農業大学卒業生の蔵人紹介-酒瓶のオブジェ、色々な酒器コレクション(住江金之コレクション)											
		古民家の再現ジオラマと古農具の展示											
(館外活動) 三会堂ビル		東京農業大学創立125周年記念特別企画 三会堂ビル「食と農」の博物館展示コーナーの開設/博物館所蔵資料「古農具」の展示											
催事	①「サクラソウ」展~マスタダセンセイからの贈り物~	(主催) (財)進化生物学研究所(榎田 信彌)				(期間) 2018.4 下旬~5 初旬							
	②「農のいけばな」展	(主催) 日本農業新聞				(期間) 2018.10.13(土)・14(日)							
	③東京農業大学「食と農」の博物館の収穫祭	(主催) 秋田県合田農場、茨城県大嶋農場、富士宮フードパレー、長野県JA中野市、同伊那市				(期間) 2018.11.2(金)~4(日)							
	④第7回 木曾川源流の里 木祖村物産展「山からの贈り物」	(主催) 長野県木祖村商工会				(期間) 2018.11.23(金)・24(土)							
	⑤第11回 すんきの里 信州木曾町の観光と物産展	(主催) 長野県木曾町				(期間) 2018.12.1(土)・2(日)				※上記期間は変更の可能性あり			
その他の催事	○富士宮フードパレー(主催) 静岡県富士宮市、東京農業大学「食と農」の博物館 ○大嶋農場(茨城県) ○その他												

バイオリウム

「食と農」の博物館に隣接して、2005年8月に展示温室バイオリウム(BIORIUM)が博物館と一体の施設としてオープンしました。BIORIUMは、生命・生物を表すBIOと、空間を表すRIUMとの造語で、「生き物の空間(施設)」を意味しています。水族館をAQUARIUMと呼ぶのと同じです。マダガスカルを中心に、世界の熱帯域から調査・研究のために集められた(一財)進化生物学研究所の貴重な動植物を見ることができます。入館無料です。

●バイオリウム・ツアー(有料)

進化生物学研究所の研究員の案内で、バイオリウム内を30~40分ほどかけて見学するツアーです。

(開催日) 火曜日・木曜日 時間は両日共に①14:00~ ②15:00~

(料金) 大人 500円/団体(5~15名)の場合 400円

子供 250円

※団体の場合は、前日までにお申込みください。個人の場合は当日でもお受けいたします。

ただし上記以外の日時でも、事前にご相談いただければお受けできることがあります。

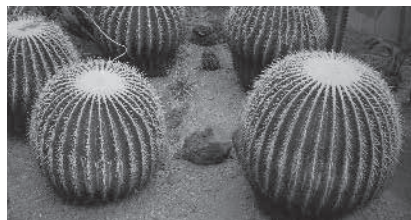
※お申込み・ご相談は、進化生物学研究所(電話03-3420-7449)に直接お願いいたします。

※休館日は博物館に準じます。

バイオリウム



ワオレムール



キンシャチ(メキシコ原産のサボテン)



ケヅメリクガメ

「食と農」の博物館・バイオリウム

(住所) 〒158-0098 東京都世田谷区上用賀2-4-28

(休館日) 毎週の月曜日、毎月最終の火曜日・大学の定めた休業日

※月曜日が法定休日の場合は開館日となり、翌日の火曜日が休館日になります。

※臨時休館日もあります。詳しくは当博物館ホームページで確認してください。

(開館時間) 4月~11月/10:00~17:00, 12月~3月/10:00~16:30

(URL) <http://www.nodai.ac.jp/syokutonou/>

<http://www.nodai.ac.jp/rieb/biorium/index.html>

コンピュータセンター

コンピュータセンターは、コンピュータ演習室・自習室、ITスタンド（無線LAN（アクセスポイント）、有線LAN（情報コンセント））を始めとした最新のコンピュータ・ネットワークシステムを設置し、学生の情報処理教育および研究者への支援、ならびに大学のネットワークを利用するために必要な「利用者ID」の管理を行っています。

場 所 世田谷キャンパス農大アカデミアセンター6階

窓口時間 月曜日～金曜日（祝日・大学休業日を除く） 8：30～17：00

コンピュータセンターHPアクセス方法：東京農業大学HP→キャンパスライフ→施設紹介→コンピュータセンター

パソコンを使いたいとき

1 コンピュータ自習室

学生ポータル利用、授業の課題作成等でパソコンが必要なとき、自由にパソコンが利用できる場所です。印刷用紙やUSBメモリなど、個人で使用するものは各自で用意してください。

《世田谷キャンパス》

場 所 農大アカデミアセンター6階（パソコン81台、スキャナ4台、プリンタ8台）

開室時間 月曜日～金曜日（祝日・大学休業日を除く）9：00～18：00（季節により時間延長、短縮あり）

開室日時の詳細は自習室入口のカレンダーか、
コンピュータセンターHPを確認してください。

《厚木キャンパス》

厚木学術情報センター（p.72, 73）をご覧ください。



2 ITスタンド（世田谷キャンパス）

家から持ってきたノートパソコンをつないで、インターネットが使用できます。建物の入口が開いていればいつでも使えます。接続方法等は、設置場所にあるマニュアルをご覧ください。

無線LAN：
（アクセスポイント） 1号館（全域）、図書館（農大アカデミアセンター3～7階）、常磐松学生会館、コンピュータ自習室（農大アカデミアセンター6階）

有線LAN：
（情報コンセント） 1号館（全域）、18号館（1, 2階）、常磐松学生会館（1階）、図書館（農大アカデミアセンター3～7階）、コンピュータ自習室（農大アカデミアセンター6階）

ネットワークを利用するにあたって

大学のネットワークを利用するためには、東京農業大学情報セキュリティポリシーに基づき、情報倫理教育を受講する必要があります。情報倫理教育は、情報基礎（一）の初回授業で実施しています。

学内のコンピュータシステムおよびネットワーク施設は、入学時に配付される「農大ネットワーク利用ガイド」もしくはコンピュータセンターのHPに掲載されているネットワーク利用ガイドラインをよく読み、ルールを守って利用してください。

各種問い合わせ

ネットワークサービスおよび施設の利用方法はコンピュータセンターHPをご覧ください。

- ・利用者IDについて
- ・パスワード／紛失・再発行について
- ・Webメールの使い方について
- ・演習室、自習室、ITスタンドの利用について
- ・Mydisk, SSL-VPN, Microsoft Officeダウンロードサービス, AutoCAD等々

不明な点がある場合は、世田谷キャンパスの学生はコンピュータセンター、厚木キャンパスの学生は厚木学術情報センターに問い合わせてください。

Microsoft Office Specialist について

コンピュータセンターでは、学生の就職支援およびWord, Excel, PowerPointなどのスキルアップの一環として、IT資格の1つであるMicrosoft Office Specialistの対策講座を開講しています。

就職活動だけでなく卒業論文にも活かすことができますので、興味のある人は是非受講してください。

国際教育プログラム・外国人留学生支援

国際協力センターは世界28ヵ国・地域に点在する海外協定校や関連機関との間で語学や農業に関する研修や異文化理解、異国民間交流を通じて国際社会に貢献できうる専門知識や技術のみならず幅広い知識をもつ人材を育成するための各種の国際教育プログラムを展開させ、多くの学生へ参加を推進しています。

一方、外国人留学生を受け入れ、有意義な学生生活を送れるような様々な支援を行っています。

国際教育プログラム

海外協定校一覧

	大学名	協定締結年月日
①	アメリカ合衆国 ミシガン州立大学 Michigan State University, MSU	1966年(昭和41年)1月12日
②	タイ王国 カセサート大学 Kasetsart University, KU	1988年(昭和63年)6月9日
③	カナダ ブリティッシュコロンビア大学 The University of British Columbia, UBC	1988年(昭和63年)7月20日
④	中華人民共和国 中国農業大学 China Agricultural University, CAU	1998年(昭和63年)8月22日
⑤	台湾 国立中興大学 National Chung-Hsing University, NCHU	1992年(平成4年)6日1日
⑥	インドネシア共和国 ボゴール農科大学 Bogor Agricultural University, IPB	1996年(平成8年)8月2日
⑦	ペルー共和国 ラ・モリーナ国立農業大学 Universidad Nacional Agraria La Molina, UNALM	1996年(平成8年)8月2日
⑧	モンゴル国 モンゴル生命科学大学 Mongolian University of Life Sciences, MULS	1996年(平成8年)8月12日
⑨	フィリピン共和国 フィリピン大学ロスバños校 University of the Philippines Los Baños, UPLB	1996年(平成8年)9月11日
⑩	大韓民国 国立慶北大学 Kyungpook National University, KNU	1998年(平成10年)4月28日
⑪	イスラエル国 ヘブライ大学 The Hebrew University of Jerusalem, HUJI	1998年(平成10年)9月28日
⑫	ベトナム社会主義共和国 ベトナム国立農業大学 Vietnam National University of Agriculture, VNUA	1998年(平成10年)11月19日
⑬	ブラジル連邦共和国 サンパウロ大学 Universidade de São Paulo, USP	2001年(平成13年)2月22日
⑭	メキシコ合衆国 チャビンゴ自治大学 Universidad Autónoma Chapingo, UACH	2001年(平成13年)7月16日
⑮	ウクライナ国 ウクライナ国立生命環境科学大学 National University of Life and Environmental Sciences of Ukraine, NUBiP	2003年(平成15年)9月19日
⑯	マレーシア国 マレーシアアブラ大学 Universiti Putra Malaysia, UPM	2004年(平成16年)3月16日
⑰	フランス共和国 リール農業高等学院 Institut Supérieur d'Agriculture de Lille, ISA	2004年(平成16年)6月16日
⑱	フランス共和国 アンジェ農業高等学院 École Supérieure d'Agriculture d'Angers, ESA	2004年(平成16年)6月23日
⑲	フランス共和国 ロース・アルプ農業栄養高等学院 Institut Supérieur d'Agriculture et d'Agroalimentaire Rhône-Alpes, ISARA	2007年(平成19年)8月27日
⑳	フランス共和国 ブルバン技術学院 École d'Ingénieurs de Purpan, INP	2009年(平成21年)4月6日
㉑	オランダ王国 ワーヘンゲン大学 Wageningen University, WU	2011年(平成23年)4月2日
㉒	フランス共和国 ボーベ・ラサール・ポリテクニク学院 Institut Polytechnique LaSalle Beauvais, IPLB	2013年(平成25年)3月7日
㉓	タンザニア連合共和国 ソコネ農業大学 Sokoine University of Agriculture, SUA	2013年(平成25年)5月1日
㉔	カンボジア王国 王立農業大学 Royal University of Agriculture, RUA	2013年(平成25年)6月1日
㉕	ブラジル連邦共和国 アマゾン農業大学 Universidade Federal Rural Da Amazônia, UFRA	2013年(平成25年)3月7日
㉖	グレートブリテン及び北アイルランド連合王国 レディング大学 University of Reading, UoR	2013年(平成25年)5月1日
㉗	ジブチ共和国 ジブチ大学 Djibouti University, DU	2013年(平成25年)6月1日
㉘	ラオス人民民主共和国 ラオス国立大学 National University of Laos, NUOL	2014年(平成26年)3月13日
㉙	アメリカ合衆国 コーネル大学 Cornell University, Cornell	2014年(平成26年)6月15日
㉚	スリランカ民主主義共和国 ペラデニア大学 University of Peradeniya, UoP	2014年(平成26年)7月22日
㉛	ミャンマー連邦共和国 イェジン農科大学 Yezin Agricultural University, YAU	2015年(平成27年)2月20日
㉜	中華人民共和国 上海交通大学 Shanghai Jiao Tong University, SAB-SJTU	2015年(平成27年)7月21日
㉝	オーストラリア国 西オーストラリア大学 The University of Western Australia, UWA	2015年(平成27年)9月10日
㉞	タイ王国 タマサート大学 Thammasat University, TU	2016年(平成28年)9月21日
㉟	大韓民国 国立江原大学 Kangwon National University, KNU	2016年(平成28年)12月1日
㊱	グレートブリテン及び北アイルランド連合王国 ハイランズ・アンド・アイランズ大学 University of the Highlands and Islands, UHI	2017年(平成29年)6月1日
㊲	インド国 ハリヤナ農業大学 CCS Haryana Agricultural University, CCSHAU	2017年(平成29年)6月5日
㊳	ロシア連邦 極東連邦大学 Far Eastern Federal University, FEFU	2017年(平成29年)8月30日

(平成29年12月1日現在)

現在、本学の海外協定校は世界28ヵ国・地域に広がり、年間100名以上の本学学生を各自の興味や目的に合わせて各海外協定校や関連機関に派遣しています。



1 インターナショナル・スタディーズ (一) (二)

本学では国際感覚を養い世界の人々の一員として活躍できる人材を養成する目的でインターナショナル・スタディーズ (一) (二) を全学共通科目として設置しています。インターナショナル・スタディーズ (一) は講義を行い、さらに演習として本学で実施している多種多様な国際協力活動の事例を通じて、海外協定校のある国々を中心に、それらの国や地域の問題点と可能性を理解し、自国と世界の国々との協調のあり方を探ります。また、インターナショナル・スタディーズ (二) では、本学の海外協定校への短期派遣プログラムに参加することにより世界人として不可欠な多様な人々・社会・政治経済・文化に関する理解を深化させます。

2 短期派遣プログラム

短期派遣プログラムは、原則として夏期休業中もしくは春期休業中の2週間で実施します。海外協定校の施設に寄宿し海外協定校の学生との交流を行い、農村や農業関連企業などを視察し派遣国の食農環境を学びます。2017年度はカセサート大学、国立中興大学、ミシガン州立大学、フィリピンロスバニオス校、ソコイネ農業大学でのプログラムを実施しました。この他にブリティッシュコロンビア大学(夏期休業中)、西オーストラリア大学(春季休業中)での、3週間ホームステイをしながら語学を学ぶプログラムを実施しました。また2018年度は、他の海外協定校においても実施を検討しています。この短期派遣プログラムに参加し、所定の手続きを行った場合はインターナショナル・スタディーズ (二) の単位を修得することができます。各プログラムの詳細については、国際協力センターもしくは学生教務課にお問い合わせください。

3 長期派遣プログラム (外国人留学生は応募できません)

海外協定校に本学の学生が半年または1年間留学するためのプログラムです。派遣学生には奨学金として往復の航空券が支給され、留学期間中は本学の授業料が免除されます。

募集は毎年10月中旬(派遣は翌年8月)に、学部2・3年次生および大学院生M1(派遣時は学部3・4年次生および大学院生M2)を対象に行います。選考は学内成績、TOEFLのスコア、作文、心理テスト、語学力、面接を総合的に評価し派遣学生を決定します。本学からの派遣学生は海外協定校において特別留学生として籍を置き、正規の授業を受講し単位を修得することができます。海外協定校で修得した単位は帰国後所定の手続きにより学部生は他学科・他学部聴講修得単位合計30単位を超えない範囲で、大学院生は10単位を超えない範囲で卒業及び修了に必要な単位に加えることができます。

●応募にはTOEFLのスコアが必要です。事前に必ず受験しておいてください。申込みから結果を得るまで1ヵ月ほど要するので余裕をもって受験してください。

●派遣期間：8月上旬～翌年7月下旬

●応募資格：学部2・3年生、大学院博士前期1年生

4 長期海外学修活動

海外において農業及び農学分野に関連した体験的学修を行うことを促進するために、「東京農業大学 教育理念「実学主義」に基づく長期海外学修活動に関する要綱」(p.213)を制定しました。

この要綱の趣旨に合った海外学修活動を希望する学生からの申請を学内で審査し、選考された場合には、従来の海外農業実習に対する減免措置が適応されます。

また、海外学修活動期間中は休学となり、復学後に所定の手続きを行うことにより、所定の単位を卒業要件として加えることができます。

募集および選考については、学生ポータル「国際交流情報」をご覧ください。

※語学留学、農業及び農学分野に関連しない体験的学修は対象とならないことを留意してください。

5 世界学生サミットと世界学生フォーラム

世界学生サミットは2001年11月に「新世紀の食と農と環境を考える世界学生サミット」をテーマとして本学学生（外国人留学生を含む）と海外協定校学生が世田谷キャンパスに参集して2日間にわたり、人類が直面する深刻な諸問題に関する意見・情報交換および彼ら自身の役割について討論する国際会議として発足しました。翌年2002年には世界をつなぐ学生間のネットワーク化を進める宣言の下、本学と海外協定校学生で構成された組織である世界学生フォーラム（ISF）を立ち上げ、日頃より各国の食・農・環境について情報交換・討議をしながら次回の世界学生サミットに向けての活発な活動を行っています。第18回を迎える世界学生サミットは2018年9月27日および28日に“Students Taking Action to Increase Youth Involvement in Sustainable Agriculture and to Close the Gap Between Actors in the Food System.”をサブ・テーマとして本学で開催する予定です。

6 国際教育プログラム

2008年4月にカリキュラム改正を行い、国際教育プログラム（CIEP）^{シエップ}をスタートしました。このプログラムは講義・フィールドスタディ・ワークショップにより編成されており、1週間のプログラムを修了すると2科目4単位修得することができます。また、先述の世界学生サミットは、この「国際教育プログラム（CIEP）」の一環として位置づけられ、その座長と発表者には2単位が与えられます。

7 世界展開力強化事業による中南米大学との短期・長期交換プログラム

平成27年度文部科学省「大学の世界展開力強化事業」に本学の取組み「中南米地域における食・農・環境分野の実践的な専門家育成」が採択されました。このプログラムでは、本学と中南米海外協定校であるサンパウロ大学とアマゾン農業大学（ブラジル）、チャピング自治大学（メキシコ）、ラ・モリーナ国立農業大学（ペルー）との連携を強化しながら、既に実施している留学プログラムに加えて、農学系インターンシップを行い総合的実学教育プログラムを実施しています。プログラムの目的は、中南米地域で活躍できる開拓（開発）型グローバル人材を育成することです。対象は学部生とし、短期派遣（約2週間）と長期派遣（6ヵ月または1年）を実施しています。募集等は本学海外短期派遣プログラムと長期派遣プログラムと同日程で行う予定です。

8 学生チューター制度（GCSTS）

本制度は学部3年生以上及び大学院生がチューターとなって、日本に来て間もない留学生への生活面でのサポートを行います。また、英語をはじめとし、外国語に興味のある学生に対する語学のサポートを行うことも目的とした制度です。

学生チューターに興味のある学生、生活面や語学の支援を受けたい学生は国際協力センター、もしくは学生教務課にお問い合わせください。

9 日本学生支援機構で募集する留学

文部科学省の外郭団体である（独）日本学生支援機構が行なう外国政府等奨学金留学生の募集があります。募集については農大の学生ポータルや国際協力センター、学生教務課の掲示で確認してください。

外国人留学生支援

I 学費等の納入について

在留資格が「留学」である学生には学費の納入を年間4分割で請求しています。第1回目から第4回目の各回の納入期限日までに必ず学費等を納入するようにしてください。やむを得ず期限日までに払えない場合は国際協力センターまたは学生教務課へ連絡してください。

学費の滞納がありますと、奨学金の申請や支給に不都合がでるだけでなく、学籍が取り消されることもあります。

II 在留カードの写し（両面）の提出について

出入国管理及び難民認定法第19条の17に基づき、外国人留学生の在留資格を管理するため、毎年4月上旬に在留カード両面のコピーを提出してもらいます。また、更新した際には必ず新しい在留カードの写し（両面）を提出してください。

III 奨学金

奨学金の募集の案内は随時、学生ポータルサイトでお知らせしています。文部科学省外国人留学生学習奨励費及び東京農業大学外国人留学生奨学金の募集は毎年年度初めの4月にあります。

奨学金を応募するためには在留資格が“留学”であることが必須です。

IV 国民健康保険

区（市）役所の国民健康保険課で加入手続きができます。国民健康保険の加入により治療費は3割負担で済むことになります。必ず加入して保険料を納入して下さい。

医療機関を利用する際にはこの保険証を提示すれば医療費の7割が免除されます。

なお、健康診断や美容整形、歯科矯正、交通事故等については保険の対象外になりますので注意してください。

V 留学生住宅総合保障制度

留学生が賃貸住宅に入居するにあたり保証人を探す難さや保証人の負担を軽減し留学生の賃貸住宅への円滑な入居を促進することを目的とした制度です。この制度を利用したい留学生は国際協力センターへ相談ください。

VI 外国人留学生向け年間行事

新入留学生ガイダンス

入学式当日に本学での有意義な学生生活を送ることができるようガイダンスを開催しています。

留学生懇談会

新入留学生の紹介や学生間及び教職員との交流を目的に年一回5月か6月に世田谷キャンパスで開催しています。

日帰りバス旅行

日本の文化、歴史、農業などを理解し異文化体験を目的として年一回冬季（1月頃）に企画されます。

今までには栃木県にある足利学校・神奈川県小田原市のかまぼこ工場、小田原城、群馬県にある富岡製糸場（世界遺産）を訪れています。

卒業する留学生を祝う会

毎年3月上旬に卒業年次生の留学生をお祝いする会を開催しています。

VII 在留資格等に関すること

英語等の言語で閲覧可能ですので、入国管理局のホームページを確認ください。

http://www.immi-moj.go.jp/newimmiact_1/

在留カードは中長期在留者に対して上陸許可や在留資格変更許可、在留期間の更新許可などの在留に係る許可に伴って交付されるものです。



新たに来日して出入国港において在留カードが交付された方は住居地を定めてから14日以内に在留カードを持参の上、住居地の地区町村の窓口でその住居地を法務大臣に届け出てください。また引っ越しをした場合も変更後の住居地に移転した日から14日以内に在留カードを持参のうえ移転地先の地区町村の窓口でその住居地を法務大臣に届け出てください。

所属機関の変更（在籍校 例えば日本語学校から東京農業大学へ変更）が生じた場合は14日以内に地方入国管理官署へ出頭または東京入国管理局への郵送により法務大臣に届け出てください。

在留期間の更新

在留期間を更新するためには在留期間の満了する3か月前から当日までに入国管理局へ期間更新の手続きをしなければなりません。手続きに必要なものは、在留期間更新許可申請書（大学の押印が必要）在学証明書、成績証明書、旅券、在留カード、経費支弁に関する書類、手数料等です。なお更新した後に受け取った新しい在留カードの両面の写しを必ず国際協力センター又は、学生教務課へ提出して下さい。

再入国許可

有効な旅券及び在留カードを所持する外国人が出国する際、出国後1年以内に本邦での活動を継続するために再入国する場合は原則として再入国許可を受ける必要がなくなります（この制度を「みなし再入国許可」といいます）。

出国する際には必ず在留カードを提示しなければなりません。

みなし再入国許可により出国した方はその有効期間を海外で延長することはできません。出国後1年以内に再入国しないと在留資格が失われることとなりますので注意してください。

資格外活動

留学中の学費や生活費を補うために学業の妨げにならない範囲でアルバイトをするには入国管理局へ出頭し資格外活動許可の申請をしなければなりません。

アルバイトは週28時間以内（夏期、冬期、春期休暇中は1日8時間以内）と制限されています。制限時間を超えてアルバイトをすると本国への送還などの処分を受けますのでルールに従ってアルバイトをするよう注意して下さい。また風俗営業や風俗関連営業が行われる場所でのアルバイトは禁じられています。スナック、ナイトクラブ、客の接待をして飲食させるバーなどでは皿洗いや清掃の仕事をする 것도禁止されていますので十分に気をつけてください。

資格外活動許可申請の際に必要なものはパスポート、在留カード、学生証、資格外活動許可申請書です。

以下は各キャンパスに在籍の外国人留学生が出頭するのに便利な入国管理局の一覧です。

管理局名	住 所	アクセス
東京入国管理局	港区港南5-5-30 TEL03-5796-7111	JR品川駅から都バスで東京入国管理局前
東京入国管理局 川崎出張所	川崎市麻生区上麻生1-3-14 川崎西合同庁舎 TEL044-965-0012	小田急線 新百合ヶ丘駅 南口 徒歩5分
札幌入国管理局 釧路港出張所	釧路市南浜町5-9 釧路港湾合同庁舎内 TEL0154-22-2430	釧路駅から徒歩16分

諸研究施設

総合研究所

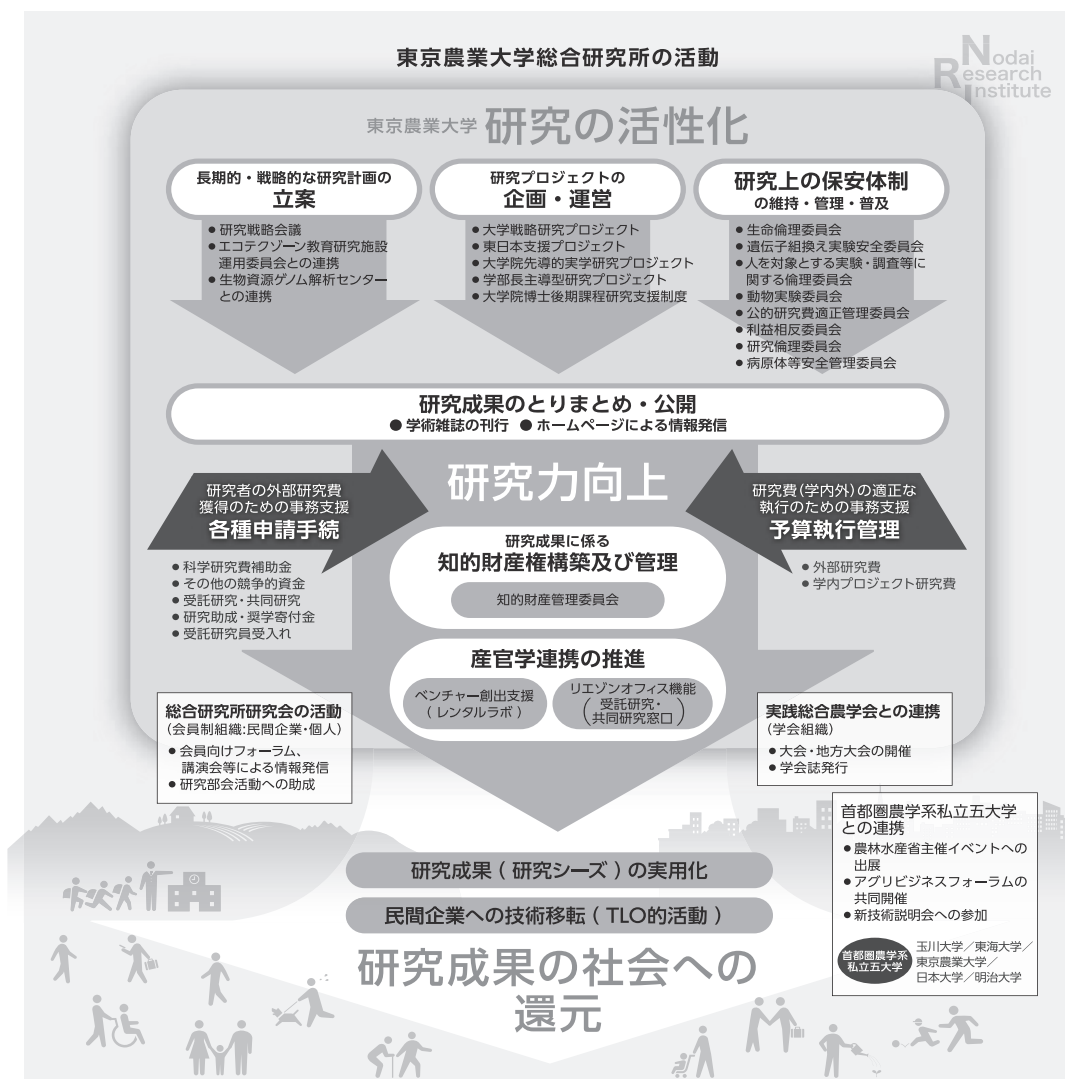
総合研究所は、本学の3キャンパスにわたる研究の活性化を推進し、その研究成果を社会に積極的に還元することにより大学の社会貢献を果たすことを目的に、研究活動全般の受発信窓口として設置された機関です。本学の戦略的研究を企画し各種プロジェクトを推進するとともに、研究上求められる様々な保安体制の維持管理の普及に関する活動を行っています。また、共同研究や受託研究を通じて、国内外の研究機関や産業界との連携における本学の研究センター的な役割を担っています。

主な活動は、本学が重点課題として掲げる「生命」、「食料」、「環境」、「健康」、「バイオマスエネルギー」、「地域創成」の各分野において長期的な研究戦略を立案するとともに、これらを実現するためのプロジェクト研究の企画と実施、社会的ニーズのある研究テーマの発掘、研究成果をもとにした知的財産権の確立、民間企業への技術移転などを目指しています。

また、産官学を柱とした共同研究の支援や科学研究費をはじめとする各種研究費獲得のための情報提供及び事務支援、国内産業界と連携した総合研究所研究会の運営、研究成果を発信するための学術雑誌の刊行や特別講演会・シンポジウムの開催など、本学の研究力向上のための総合的な活動を行っています。

なお、総合研究所が開催する特別講演会やシンポジウムは、学生も無料で参加することができますので、奮ってご参加ください。

総合研究所の事務部は世田谷キャンパス15号館2階にあります。



生物資源ゲノム解析センター

生物資源ゲノム解析センターは、農学研究分野を中心とするゲノム解析の研究を推進しています。動物・植物から微生物まで多岐にわたる生物種を研究対象としており、全学的に広く研究支援を行っています。本センターでは、研究員、技術員、事務員などのスタッフにより「次世代シーケンサー」と呼ばれるゲノム解析機器のオペレーション、情報解析、など研究の進捗をスムーズに進めるための体制を整えています。最先端技術を用いた研究は一般に医学分野や理学分野を中心に発展することが多いですが、本センターは非モデル生物ばかりの農学分野における国内唯一の農学ゲノム解析拠点として、本学の研究基盤形成を目指しています。



現在、本センターではショートリード型の次世代シーケンサー5台と、大規模解析サーバー10台を運用しています。このように充実した次世代シーケンサーの使用環境と稼働実績を有する施設は、特に農学分野においては国内トップの施設といえるでしょう。

農 場

大学には伊勢原農場・富士農場・網走寒冷地農場・宮古亜熱帯農場の4農場が設置されていますが、伊勢原農場・富士農場は農学部、網走寒冷地農場は生物産業学部、宮古亜熱帯農場は国際食料情報学部それぞれ所属しています。

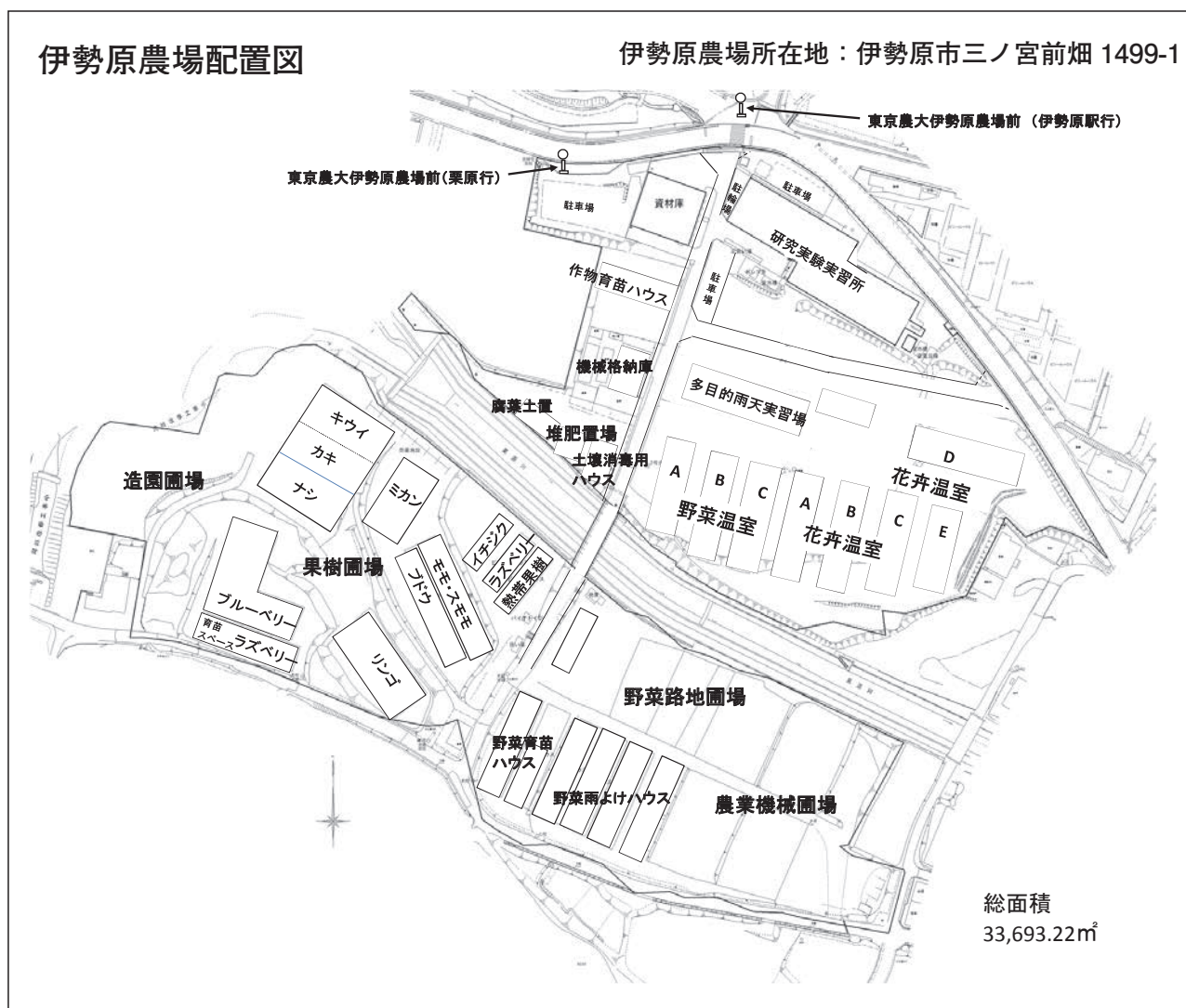
農場を使用して農業実習や演習・実験を実施している学科は、農学部全学科、生命科学部分子生命化学科、地域環境科学部造園科学科および生産環境工学科、地域創成科学科、国際食料情報学部国際農業開発学科および国際食農科学科、生物産業学部全学科であり、教職課程の「栽培」実習などでの使用もあります。実習は、各学科の教育的効果を配慮しながら学科教員や農場教職員等が指導にあたっています。

農 場	所 属 する 学 部
伊 勢 原 農 場 棚 沢 圃 場 富 士 農 場	農 学 部
宮 古 亜 熱 帯 農 場	国 際 食 料 情 報 学 部
網 走 寒 冷 地 農 場	生 物 産 業 学 部

伊勢原農場

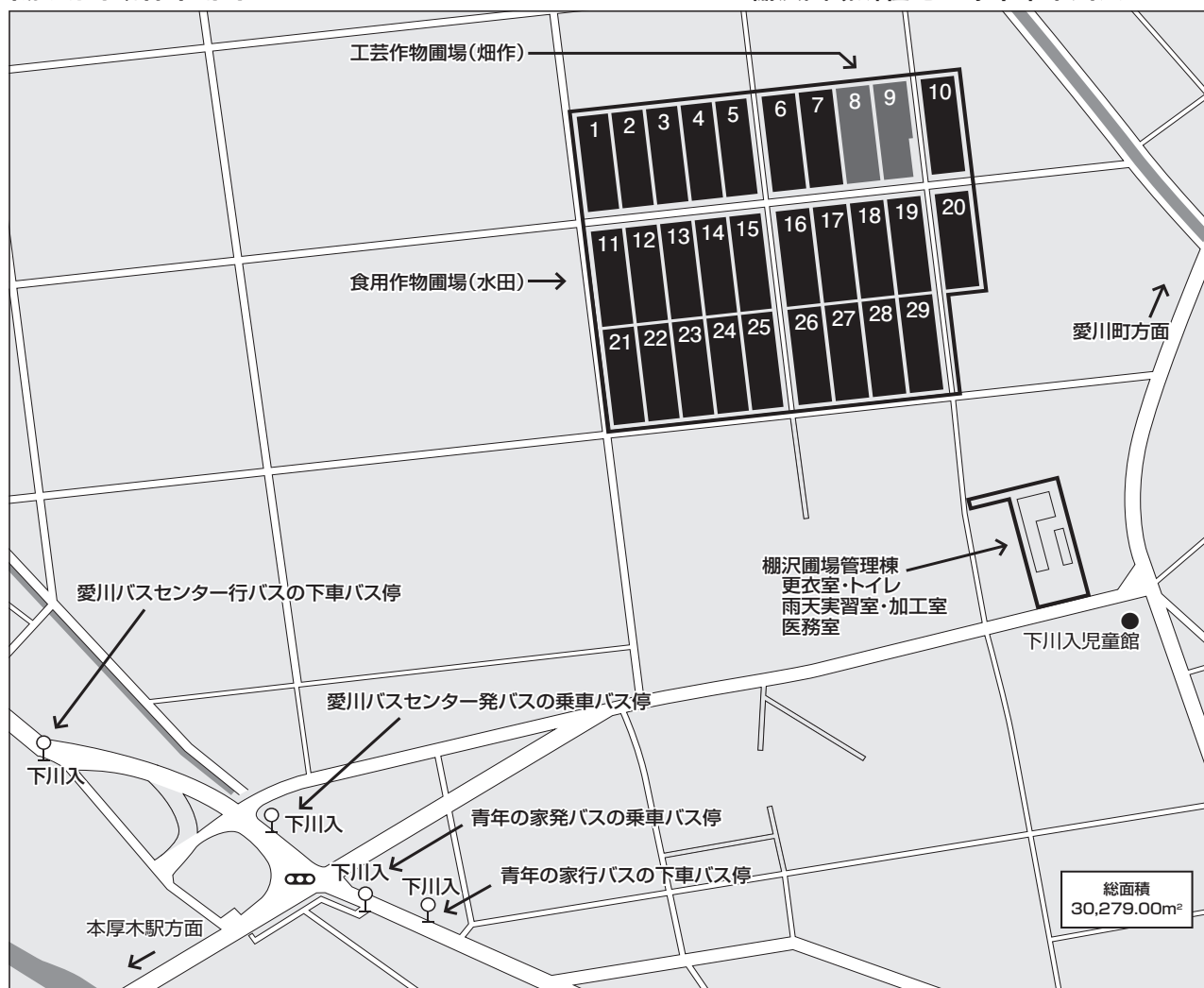
伊勢原農場は、柵沢圃場を含む農場からなっています。伊勢原農場は、小田急線の北側、丹沢大山山系南東麓の神奈川県伊勢原市三ノ宮に位置し、南に相模湾を臨む南向き緩斜面にあります。気候は比較的温暖で、柑橘栽培の北限に位置します。農場の用地は約3haで、ほぼ平坦な地形にあることから、集約された農場として、効率的な運用が見込める農場であり、主に園芸(果樹・野菜・花卉・造園)に特化した実習教育の場として、実践教育に対応しています。農場は、平成22年度に圃場整備が行われ、平成23年度は、土壌改良を実施した露地野菜、造園および農業機械の3部門で実習が開始され、果樹部門においては果樹棚が完成しました。平成24年度は、花卉および野菜のガラス室や造園の雨除けハウスが完成し、果樹部門においては果樹苗を定植しました。また、冬季から翌春に花卉および野菜の施設移転が完了し、土壌消毒施設や堆肥置き場、農機具舎などの付帯施設の完成を受けて、平成25年4月から全部門の実習教育と研究が行われています。平成27年度には穀物調整機を厚木キャンパスから移設し、実習教材に活用しています。

柵沢圃場は、伊勢原農場から北方約15kmに位置した中津川水系の厚木市柵沢地区に面積2.9haを有し、水稻栽培を専門に行う圃場ですが、平成24年度には、農機具舎・加工室が完成し、圃場の一部を工芸作物で使用するための整備を行いました。平成25年度からは、工芸作物と集結し実習教育と研究が行われています。



棚沢圃場配置図

棚沢圃場所在地：厚木市下川入 1416-1



諸研究施設

伊勢原農場・棚沢圃場発着路線バス時刻表

○伊勢原駅発、伊勢原農場行バス時刻表

伊勢原駅北口 (出発時刻)	東京農大 伊勢原農場前 (到着予定時刻)
8:40	8:56
9:35	9:51

○伊勢原農場発、伊勢原駅行バス時刻表

東京農大 伊勢原農場前 (出発時刻)	伊勢原駅北口 (到着予定時刻)
15:05	15:23
16:05	16:23
17:05	17:26

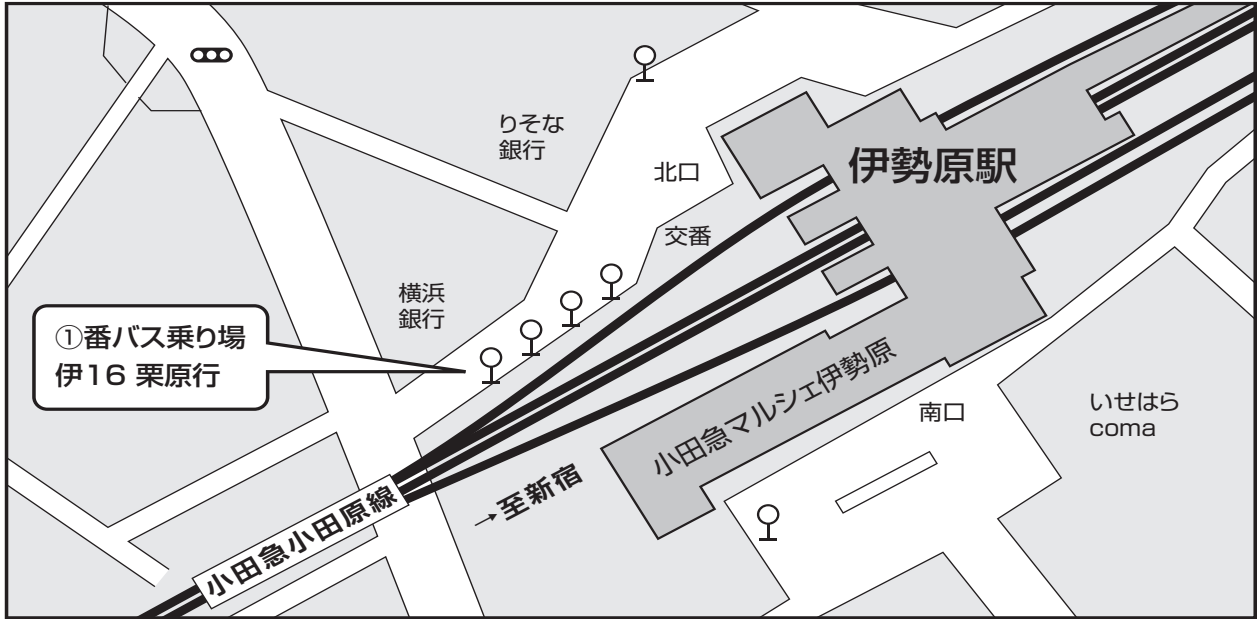
○本厚木駅発、棚沢圃場(下川入バス停)行バス時刻表

本厚木駅 (出発時刻)	下川入 (到着予定時刻)	系統
8:02	8:32	青年の家行
8:07	8:34	愛川バスセンター行
8:40	9:07	青年の家行
8:47	9:11	愛川バスセンター行
9:07	9:34	青年の家行
9:22	9:46	愛川バスセンター行
9:40	10:07	青年の家行

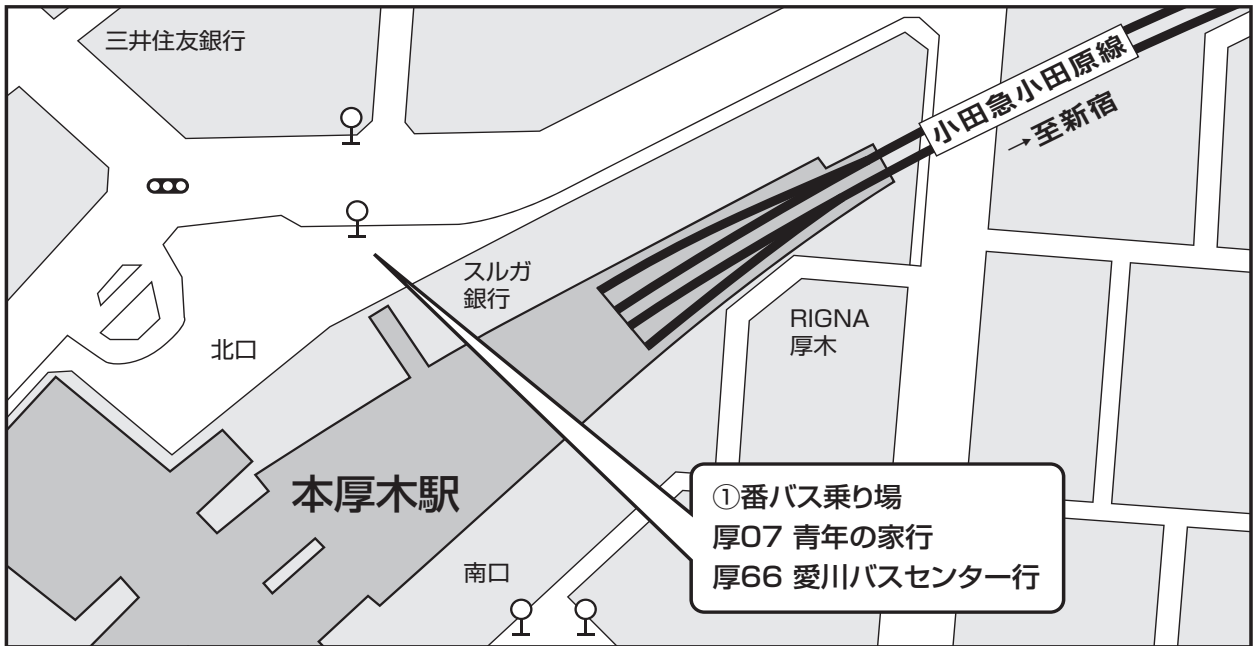
○棚沢圃場(下川入バス停)発、本厚木駅行バス時刻表

下川入 (出発時刻)	本厚木駅 (到着予定時刻)	系統
12:26	12:53	青年の家発
12:55	13:24	愛川バスセンター発
13:11	13:38	青年の家発
13:55	14:24	愛川バスセンター発
14:01	14:28	青年の家発
14:55	15:24	愛川バスセンター発
15:01	15:28	青年の家発
15:55	16:27	愛川バスセンター発
16:01	16:34	青年の家発
16:40	17:13	愛川バスセンター発
16:56	17:29	青年の家発
17:25	17:58	愛川バスセンター発
17:51	18:24	青年の家発

伊勢原農場行バス乗り場（小田急伊勢原駅）



柵沢園場行バス乗り場（小田急本厚木駅）



下車バス停しもかわいり（「下川入」下図バス停マーク）

「下川入」バス停は4カ所あり、「厚07」系統と「厚66」系統とでバス停の位置が異なるので注意してください。



富士農場

富士農場は、静岡県富士宮市朝霧高原に位置し（海拔816m）、霊峰富士のパノラマが広がる富士箱根伊豆国立公園の一角を構成しています。

本農場は、昭和16年本学の富士修練農場として開設され、昭和40年代から畜産実習の充実を図るために整備が進み、昭和59年から平成2年度にかけて当時の厚木農場（現在の農学部厚木キャンパス）の牛部門、養豚部門、家禽部門が全面的に移設・統合されました。総面積は33haを有し、研究・教育施設3haと牧草地12ha、森林原野18haで構成されています。

現在、酪農部門ではホルスタイン種をメインに、ジャージー種、ブラウンスイス種、エアシャー種、肉牛部門では黒毛和種をメインに褐毛和種を、養豚部門では欧米改良種の大ヨークシャー種、中ヨークシャー種、パークシャー種、デュロック種の他これらの交雑種を、家禽部門では採卵鶏、ホロホロチョウの他、天然記念物の日本鶏等を飼養しています。

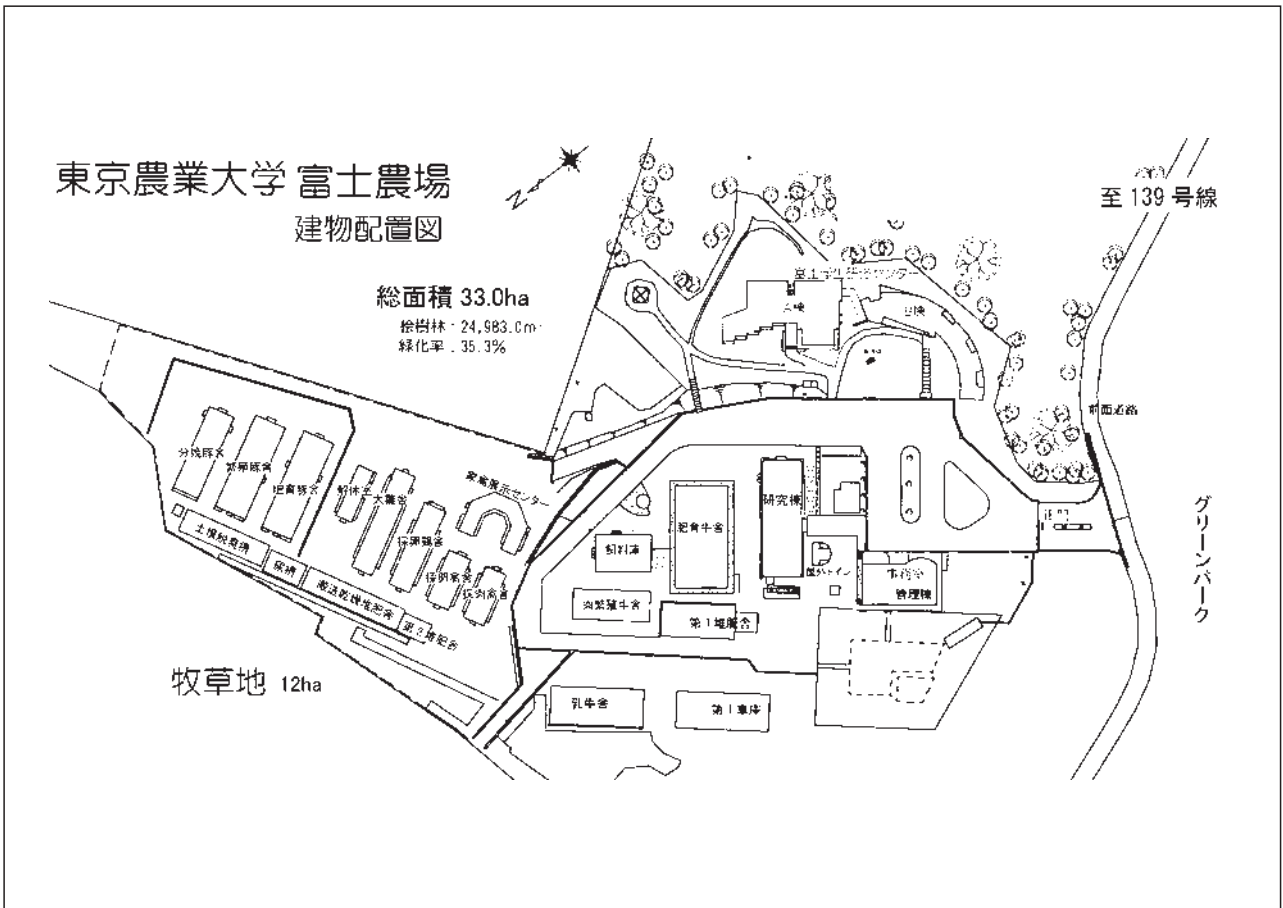
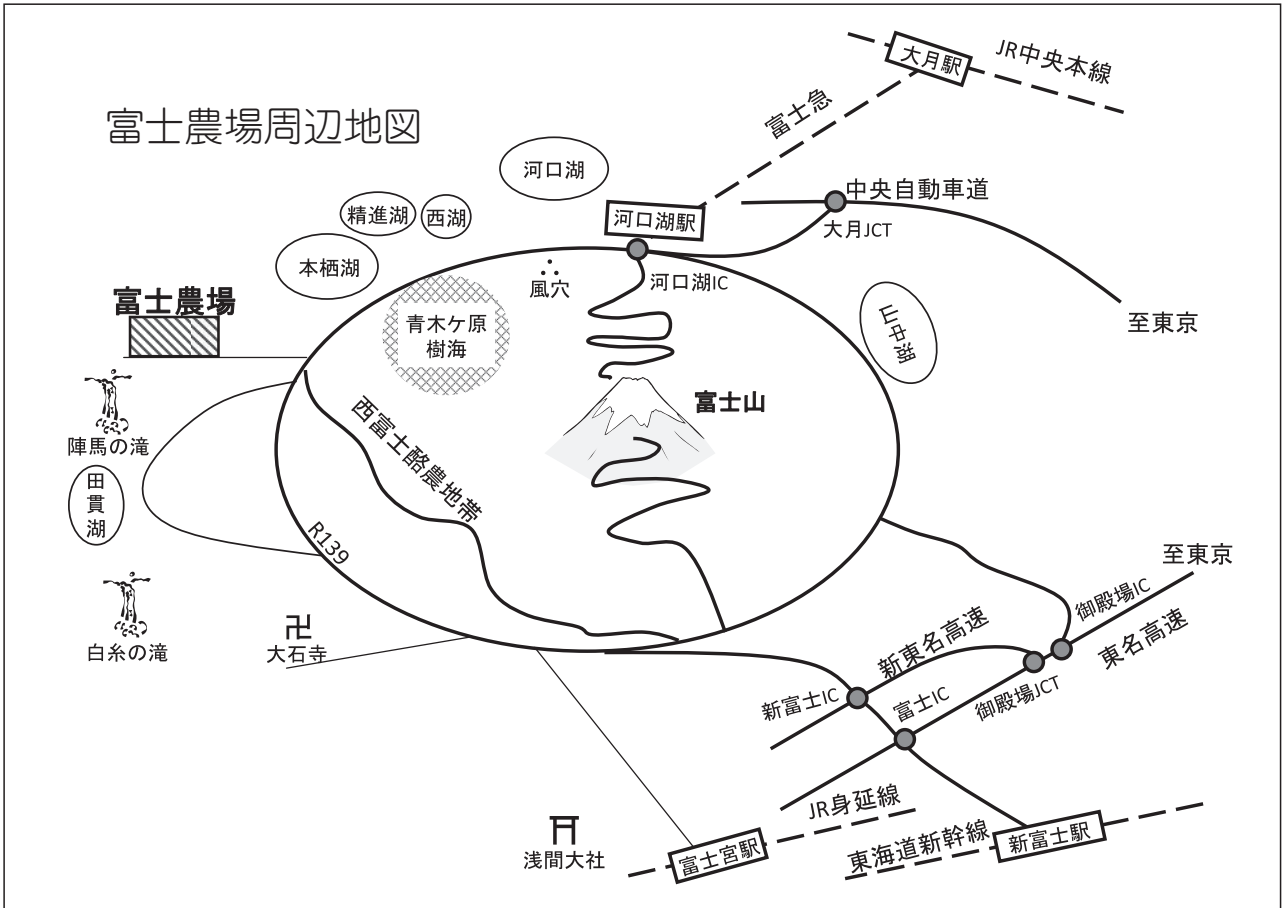
教育関係では本学学生の実習や卒論研究も受け入れています。また、小、中、高校生の体験学習や、本学が開催している東京農大オープンカレッジ講座の体験学習、国際協力機構（JICA）の研修生の受け入れ、青年海外協力隊の派遣前研修、教育後援会、本学海外協定校の農場見学等にも活用されています。さらに、当周辺地域は西富士開拓酪農地帯であり地元農業関係者と密接に連携を取っています。



富士農場研修センター



学生による放牧地への牛追い



宮古亜熱帯農場

本農場のある沖縄県宮古島は、北緯24度から25度、東経124度から125度の間に位置し、沖縄本島と台湾のほぼ中間にあります。年平均気温は23℃、平均湿度80%と亜熱帯海洋性気候に属し、島は年間を通して緑に包まれ、島は色とりどりのサンゴ礁にかこまれています。このように豊かな自然に恵まれた宮古島は、観光地としてはもちろんのこと、全日本トライアスロン大会の開催地としてスポーツアイランドとして知られています。また、近年では風力発電、太陽光発電（メガソーラー発電）、さとうきび残渣を利用したバイオエタノールプラントの研究施設を有するなどエコアイランドとしても注目されています。

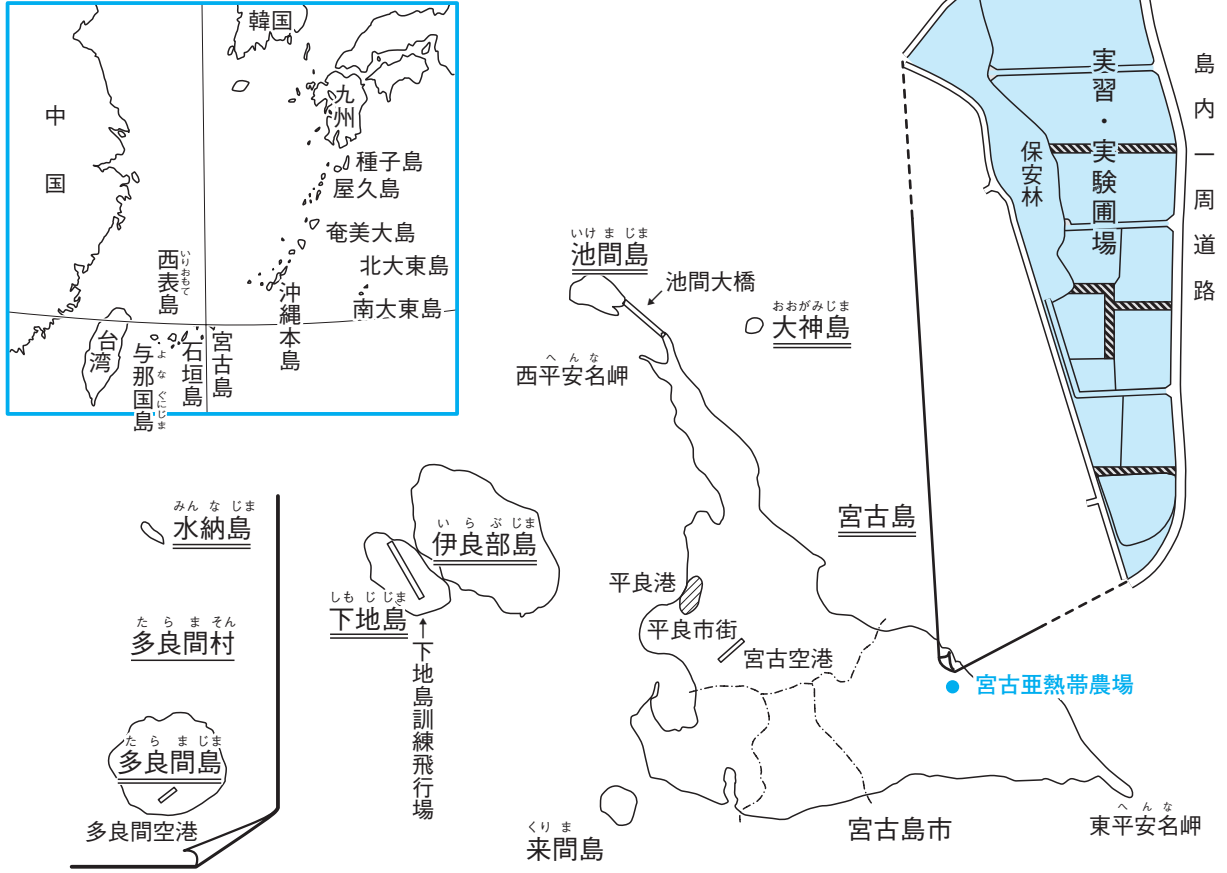
現在宮古島では、農地の基盤整備事業をはじめ、世界的にも珍しい地下ダムの建設、無料で渡れる橋では日本一の伊良部大橋（3,540m）の建設（2015年完成）、総合室内体育施設など各種公共施設の整備が進められています。島の基幹産業である農業に関しては、地下ダムの水を利用した灌漑施設の整備により基幹作物であるサトウキビや葉タバコ、施設園芸（マンゴーや野菜類）が盛んになってきています。

宮古亜熱帯農場はこのような環境下で、熱帯農学に基づく熱帯・亜熱帯農業の実習教育と試験研究を行うことを目的として設置されました。本農場は、宮古島の地域自治体等との協力により、地域農業の発展や農業生産環境の保全をともに考え、これらの活動を通じ地域と共に歩むことを基本姿勢のひとつとしています。農場の面積は約9.5haで、現在、農場施設として管理研究棟、学生宿泊棟（72名収容）、研究者宿泊棟、農機具収納舎、大型冷蔵庫、職員住宅及び育苗ハウスが設置されています。農地は、防風林に囲まれ、圃場ではヤムイモやサトウキビなどの熱帯作物、温室内ではマンゴーなどの熱帯果樹が栽培され実習や研究に利用されています。また、ヤムイモやタロイモなどは日本でも最大規模の遺伝資源を有し、その他にコーヒー（アラビカ種）の主要品種も有しています。教育面では、国際農業開発学科の学生（約160人）が農家の協力のもとで毎年1週間の実習を行うほか、教員や大学院生の研究、学部学生の卒業論文研究、また、協力隊を志望する農大卒業生向けの農業研修（3-6カ月）や青年海外協力隊の派遣前技術補完研修なども行っています。

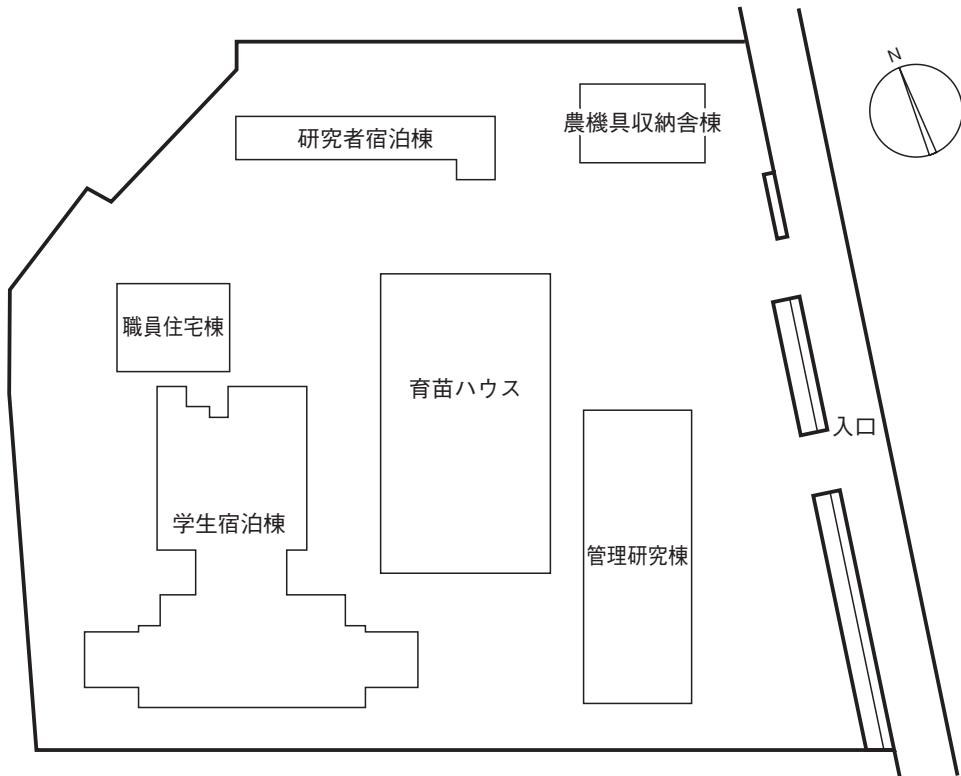
本農場における熱帯農業や熱帯の食料生産環境に関する幅広い研究教育の実施は、わが国が世界から期待されている開発途上国との国際協力活動においても、とりわけ熱帯地域の農業開発協力を携わる人材育成にも大きく貢献し得るものとなっています。



宮古亜熱帯農場案内図



宮古亜熱帯農場施設配置略図



網走寒冷地農場

国定公園小清水原生花園「トウフツ湖」南畔にひらける、日本有数の大規模畑作農業が展開する網走市に位置する網走寒冷地農場は1982（昭和57）年、生物産業学部の開設（1989（平成元）年）に先駆け、寒冷地大規模畑作の実習と産・官・学が一体となった教育と研究を推進し、地域と共に歩む大学農場を目指して開設されました。

約21haの圃場には、北海道を代表する畑作物（秋播き小麦・ビール大麦・馬鈴薯・てん菜）の他に根菜類（ナガイモ・ゴボウ・ダイコンなど）が栽培され、当農場職員が農家資格を有し、地域営農集団組織の一員となって地域農家と共に組織的な運営を行っています。同時に、試験圃場による試験・研究が行われ、地域農業の発展にも大きく寄与しています。

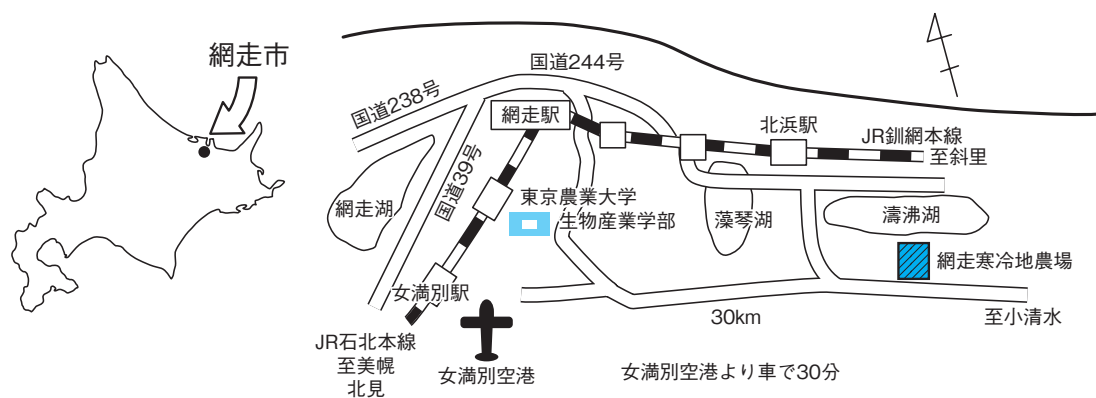
この農場はリアリティのある地域農業問題の解明を通してこれからの新しい農業の構築をめざすことを基本理念として掲げ、営農・教育・研究が三位一体となりながら、本学の「実学主義」を具現化できるユニークな大学農場です。

知床の山々や波静かなオホーツク海など豊かな自然環境に恵まれた北海道の網走市では、オホーツクブルーの空の下、日本有数の先端的な大規模機械化農業が営まれています。機械や施設は集団で所有して利用と作業は共同で行い、また、共同で生産資材を購入、生産物を販売しています。当地の畑作農業の経営はこのような営農集団方式を取り入れ、高生産農業として注目されています。



学生の実習風景（大麦の調査）

網走寒冷地農場案内図



網走寒冷地農場全景写真

全面積 42.70ha

(営農部圃場 19.01ha 教育研究部圃場 2.20ha 湿生林・原野 21.49ha)



農学部附属施設

■農学研究所

農学研究所は、生物資源としての動植物及び微生物の保全と農業を通じて地球環境の保全を図り、人と生物資源との有機的な共生関係の構築について調査・研究・普及活動を行って、農学分野の進展に寄与する目的で設立されました。

研究は農学部の教員を中心に、安全で安定した食料の生産と生物との共存共栄による人の生活の質的向上のためにプロジェクト研究を推進しています。また、各種のシンポジウムや講演会等も開催して、農学研究の普及・発展に努めています。

■電子顕微鏡室

走査型プローブ顕微鏡（SPM）・透過型電子顕微鏡（TEM）・走査型電子顕微鏡（SEM）、さらには元素分析X-線マイクロアナライザー等を用いて、生物や生物由来物質のナノ構造観察や機能解析をおこない、生物資源の多面的利用の研究や教育に活用しています。

■植物園

本園は農学部の主目的である生産農学と新領域である環境農学および福祉農学の教育理念に基づき設置されています。温室にはショウガ科植物などの資源植物や熱帯果樹、圃場にはホシクサ科およびイグサ科をはじめとする国内希少植物、また日本古来より親しまれてきたギボウシ、ウメ、サクラ、ツバキ、サクラソウなどの伝統園芸植物およびこれらの野生種の栽培、保護管理が行われ、教育、研究資料として提供されています。またキャンパス内には418種類の自生植物が生育しており、カタクリやニリンソウ群落が残る雑木林も保全されており、これらの環境は人の心の癒しの場としても利用されています。また本園は博物館相当施設として学内外の学芸員資格取得希望者の博物館実習の場および農業実習に利用されています。

■食品加工技術センター

ハム・ソーセージ等の食肉加工及び、チーズ・バター等の乳加工実習設備を整え、学生の食品製造実習、卒論実験、企業との共同研究および市民を対象としたカレッジ講座などに利用されています。

■バイオセラピーセンター

当センターは、動植物等の生き物と人との共生をテーマに、教育や研究を行う施設です。犬舎を備えた管理棟と厩舎に、ドッグランや馬場を付設しています。現在、馬や犬等を飼養管理し、人と密接にかかわる動物に関する研究だけでなく、動物を活用するプログラムも実施しています。

応用生物科学部附属施設

■応用生物科学研究所

所属学科に共通する分野を総合的に研究する機関。植物、動物、微生物、食品、健康、環境をキーワードに応用生物科学の新しい視点、可能性を追求していきます。

■食品加工技術センター

小工場規模の設備を整え、食品関連産業と連携し食品の製造に関する教育と研究を行っています。ジャム、ソーセージ、乳酸菌飲料、パンなどの製造実習を通じ、学生が実践力を身につける場として使われる等、東京農大のモットーである「実学」を継承した施設です。

生命科学部附属施設

■生命科学研究所

ゲノム・細胞レベルから生物の高次生命機能にいたるまで物理化学的・分子生物学的手法を主とする解析をテーマとすると同時に、新規有用分子の創製、新機能を有する生物の探索を含めた応用研究を目指します。また、生命科学部を構成する3学科が協力し、分野横断的な研究の開拓にも重点をおいています。それにより、現在から将来にわたり人類が直面する問題の解決につなげていきます。

■アイソトープセンター

放射性同位元素を用いて、微生物や動植物のトレーサー実験、生化学実験、組換えDNAを含む遺伝子工学的実験等、ライフサイエンスの広い分野に対応する基礎研究・応用研究を支援しています。

■菌株保存室

研究・応用利用に関わる重要な微生物株を保存・管理すると共に、有用微生物の探索、保存・利用に関する教育研究を行っています。学内外の研究者や利用者の要望に応じて分譲し、微生物の応用に関する研究を支援しています。現在、保有している微生物は、細菌・酵母・糸状菌で、合わせて約7,000株におよびます。

■高次生命機能解析センター

国際水準に適合した実験動物の無菌（SPF）飼育施設です。遺伝子組換え個体を含む実験動物を管理し、生理、遺伝、発生、行動、栄養など生命科学分野の研究を支援しています。

地域環境科学部附属施設

■地域環境研究所

地域環境科学部の社会的使命は、山村・農村・都市などの地域性を尊重しながら、かつこれを上流域から下流域までひとまとまりの環境として魅力と活力に満ちた地域づくりを推進することにあります。そのためには、地域環境科学部を構成する3学科間の横断的研究を推進し、環境科学の総合的な発展を図らねばなりません。研究テーマは、自然環境の保全と適正な利活用をより具体的な形で実現するため、①砂漠化地域の緑化、②エコ・テクノロジーの基礎的技術開発、③地域活性化の地方政策に関する研究などに、学部全員の教員で取り組んでいます。

また、当研究所は全学的な共同研究や産業界からの委託研究のコーディネート業務を行います。スタッフは学部所属の教員が全て研究員として研究に当たります。

■奥多摩演習林

本学の演習林は昭和53年に私有地を購入し、東京都奥多摩町に奥多摩演習林として設置されました。

平成10年4月からの新学部体制に伴い、地域環境科学部附属奥多摩演習林となりました。

奥多摩演習林は、面積約155haで秩父多摩甲斐国立公園に含まれています。標高は630m～1,452mにわたり動植物相の豊かなところです。また、南側には東京都の水瓶である奥多摩湖を控え重要な水源地帯になっています。演習林開設以来、調査・研究については、地質、土壌、水文、動物相、植物相を中心に森林生態学や森林環境学など林学の基礎学的な研究と、育林技術、林業経営、伐採システム、環境保全及びレ



奥多摩演習林研修センター

クリエーション利用など造林学・森林利用学・森林経営学および木材の成分、木材組織などの林産学的な研究をはじめ、環境モニタリング、野外教育などに関する森林環境の総合的な研究が進められています。また演習林では主に地域環境科学部森林総合科学科の学生の実習をはじめ、本学の学生および教職員の試験研究のために利用されています。

平成2年に完成した奥多摩演習林研修センターは、純木造建築の70名収容可能な宿泊棟、管理棟など6棟からなっています。研修センターまでは、JR奥多摩駅から約6kmで徒歩では約1時間30分を要します。

■生物環境調節室

植物の育成・生理環境に関する研究に利用する施設です。15～30℃の様々な温度に調節された人工グロースキャビネット（バイオトロン室）が主な研究施設であり、年間50件以上の研究テーマに利用されています。

■電子顕微鏡室

ウイルス等の微生物・動植物ならびに農業資材の微細構造と機能の関連を解析するため、透過型・走査型電子顕微鏡をはじめ、各種電子機器を装備し、研究教育に広く活用されています。

国際食料情報学部付属施設

■国際食料情報研究所

国際食料情報研究所は、経済、経営、国際協力の視点から地球的な規模で食料システム、環境保全型農業など、学部共通の課題を総合的に研究する機関です。調査、分析には学部学生も積極的に参加できる体制がとられています。海外プロジェクト研究のチームには、海外協定校等の協力体制の下に、海外協定校の研究者（教授等）の参加を得ながら現地調査を実施し課題に取り組んでいます。プロジェクトを通して海外協定校の研究者を日本に招いて研究上の国際交流も行っています。さらに、産学官による共同研究や受託研究のコーディネート業務も行います。

